

# 第13回風景デザインサロン●開催レポート

## 第13回風景デザインサロンの実施状況

平成21年1月30日(金)に、福岡市薬院にて、第13回風景デザインサロンを開催しました。

- 講師：小林一郎氏(熊本大学大学院)
- テーマ：風景のつくり方
- 開催時間・場所：18:30~21:00 / I CONE (福岡市薬院)
- 参加人数：18名

13回目のサロンは、風景デザイン研究会の先生方の執筆で、昨年発行した教科書「風景のとらえ方・つくり方-九州実践編-」を題材に、小林先生に制作秘話や教科書の中身を更に一步踏み込んでお話しして頂きました。教科書作成中の苦労話など、ここでしか聞けない話もあり、楽しい勉強会でした。



第13回風景デザインサロンの様子

## 講演内容の骨子

### 1. 教科書「風景のとらえ方・つくり方」制作秘話

景観に関する教科書はこれまでいくつか出版されているが、この本は特に九州の学生をターゲットに、彼らが学生時代に押さえておくべき理論と、九州実践編と題するように九州の中で見に行くべき事例を豊富に掲載している。

発行日は11月11日。これは、第一次世界大戦の終結日ということで、先生たちの教科書との格闘の日々の終わりと掛けている。また、最近はインターネットで本を売ることから、大事な表紙のデザインは小林先生と研究室学生で試行錯誤して作り上げた。

1章は風景を見る人間とその風景との関係のあり方に着目し、1部は理論、2部はそれと対応するような事例を紹介するなど、理論と実践のつながりの深い教科書になっている。また2章は風景そのものに着目した内容となっている。今後は見直しを行いながら、紹介すべき事例が増えていけば内容の変更も行うことも考えている。来年度の風景デザインサロンでは教科書を題材に各執筆者の先生の講演を行う予定である。

### 2. デザインの対象の転換-日野川橋詰広場-

日野川の事例は風景のとらえ方・つくり方のp.232に紹介されている。

当初、長崎県の美しいまちづくりアドバイザー派遣制度のもと、橋梁設計のアドバイザーとして小林先生が派遣された。しかし、いざ議論を始めると既に橋梁設計の段階は終わり、橋面の美化の話し合いが行われていた。デザインとは化粧すれば良いというわけではなく、橋詰や周辺の河川空間などとの関係を考えることも大事である。そこでデザイン対象の転換を行い、橋詰の整備と周辺の河川空間の整備を行うことになった。

デザイン対象の転換を考える上で必要なことは、その場所をより広く見ることと、より長く付き合うこと。

日野川の事例では橋梁設計を依頼された最初の段階で、橋だけを見るのではなくもっと広いエリアを考えている。さらに隣の工区の工事や流域の他の場所がどうなっているかということも考えられていた。

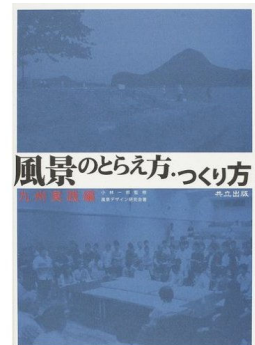
また工事の時間軸で考えると、熊本市の白川の整備のように完成までに30年やそれ以上かかる工事も多くあり、将来工事区間の周辺環境や社会条件がその長い工事期間の間に変わっていくと考えられる。そのため、工事の完成形だけを考えて設計するのではなく、現在は工事されず空いている土地には手をつけず、残しておくことも必要である。

### 3. 特異点探索 -風景を見る視点-

特異点探索は、風景共有の問題に対するひとつの解として示されている。(詳細は教科書p10参照)

特異点はもともとフランス語の point singulier という語を小林先生が日本語訳したもので、この特異点探索を、橋梁(点)を対象とした景観調査の手法の一つとして提案している。

特異点探索を行う場合、出来るだけグループを形成し、最初にそれぞれ個人で特異点を探したあと、その結果を持ち寄ってグループ内で議論を行うことが重要である。また、物を見る時は「時空物人生」(時間、地形などの空間、対象物、人間、風土や生活、歴史等)を押さえることも重要である。



風景のとらえ方・つくり方-九州実践編-(共立出版)



特異点探索で見つけた風景の例:画面右に風景の中に溶け込んだ橋が見える(出典:風景のとらえ方・つくり方、p.8)

## 質疑応答

1) (質問) 橋面工の検討から橋詰の整備を行うことになった時、予算はどこから出たのか?

(回答) 県から出ている。もともと日野川の橋梁整備は、本来なら道路担当者が行うべき整備を、河川改修に合わせて河川担当者が行っていた。しかし、橋詰の部分の整備は元来、河川が担当する区域にあり、河川予算の範疇で整備を行うことが出来た。また、整備を行う際、その整備範囲には道路や都市計画、河川の管理する区域が混在していたため、それぞれの担当の部局と整備について合意をとることが苦労した。ただ、長崎県は首長が景観整備に対し方針を出しているため、こうした整備や部局を超えた動きをとりやすい自治体である。

2) (質問) 日野川の事例は割と容易にうまくいったケースなのではないか？

(回答) ひとつの要因として長崎県のデザイン評価制度では、デザイン評価会議という委員に事業報告する場において、アドバイザーが担当者をサポートすることができる。そのやりとりの中で信頼関係を結ぶ機会がある。さらに担当者はデザイン評価会議で評価されることで、どんどんやる気になっていくという効果もあり、それらをうまく利用することができた。また、担当者も取り組む期間が進むにつれて、デザインの意味がわかってきて、橋梁の美装化ではなく、地域をどう作っていくかが重要であるという考えに変わっていった。もう一つは最初から行政に敵対姿勢をとる住民と行政の接点をアドバイザーがどうやって作っていくかが大事である。

3) (質問) 全体的特異点の一つしか無いということだが、その橋にまつわる背景や歴史が全部映っている風景だとしたら、最終的に航空写真のようなものまで対象になるのか？特異点を探すエリアは限定されるのか？

(回答) 航空写真は特異点とはいえない。しかし見る対象の視点場で、景となりうるものは全て特異点。特異点探索は視点場のチェックであり、現場を歩き回るための方法論なので、特異点に一つの正解があるわけではない。一つに絞るかどうかということはその先の議論の問題。何か一つの特異点にしぼれと言った時に議論が起こるが、その一つは対象となる橋とその周辺の地形に影響して決定する。小国の写真例（風景のとらえ方・つくり方、p.8）は小国らしさとして一つに特異点を絞るなら、教科書の写真の点だろうという例を示したもの。

4) (質問) 現在、風景をつくるということをどのように考えているか？

(回答) あまり難しくは考えていない。ある時点までは自分は数学的記述で出来る範囲であればコンピュータで良い物はつくれると考えたが、デザインは数学的記述ができる範囲の外にあった。学位論文で数学的に限定した部分はやったので、現在は、限定できない部分をどうするかということを考えている。

その部分については、今から30年前にはじめて海外旅行した時、日本と海外は違うなと感じ、その違いがわかれば風景をデザインできるのではないかと思った。それを突き詰めていくと、どんどん橋という対象から遠ざかっていった。橋をデザインする時、橋だけではなく、橋を含めた周りも良くないと橋は良くならない。特異点の話をしたが、橋を見る時には橋の良し悪しだけでなく、自分が橋を見ている場所＝特異点も良くないといけないということに気がついた。このように対象の周辺を含めて風景をつくることを皆で考えていければ良いし、誰もやらないなら一人でもぼちぼちやるしかない。この10年ほどそういうことを考えて実践していたら、九州にどんどんと景観先生が集まって来た。

5) (質問) フランスと日本の風景の考え方に対する違いは何か？

(回答) 教育の違いが大きい。フランスの教育方法は先生によってやり方はばらばらだが、共通していることは、小学生の時から国語の授業で絵を描かせるなど、見せ方、美的な面での訓練を行っている。また、主張することが当たり前の世界。さらにフランスでは何か議論が巻き起こったときに、100年の時間をかけても徹底的に議論される。そのように議論できる土壌がもともとある。逆に日本人の自分たちはそういうことを訓練していないので、色彩などの感覚は自分たちで磨いていくしかない。大切なことは出来るだけものを見に行くこと。その場合、一人より数人で見に行き、議論するほうが良い。

また海外では寺院を作るのに100年以上かかるために、建築など、自分の成果は自分が死んでから出るものということが当たり前で認識されている。フランスなどヨーロッパの人たちは貧乏で死んで当たり前、死後に有名になれば良いという考えでいる。反対に現在の日本では短期的な結果しか求めていない。

そして、デザインはOrigineがあるかどうか重要。Origineとは自分たちや先祖が生み出してきた何かであって、フランスの橋梁デザイナーたちは良いものをつくる意志と、そのOrigineを常に考えている。また、Originalという言葉はOrigineを出す＝自分たちの起源は何か表現することであり、人と違うことを出すことという意味ではない。今の日本は全てヨーロッパから持ってきてVariationしかない。

## 次回の予定

平成20年度の風景デザインサロンはこれで最終回です。これまでのたくさんの参加と活発なご議論をありがとうございました。来年度からは、『風景のとらえ方とつくり方 - 九州実践編 -』を教科書とした講義シリーズを予定しています。ぜひまたご参加ください。